京都教育大学
KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION
教育創生リージョナルセンター機構
教職キャリア高度化センター

NEWS LETTER 第３号（R4.2.3）

「学び続ける教員へのメッセージ」講演会開催のお知らせ

教職キャリア高度化センターでは、今年度も「学び続ける教員へのメッセージ」として、２０２２年２月１９日（土）に講演会を開催します。

２０２０年代を通して実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」があげられています。今後教育現場で「個別最適な学び」を支えるコーチング、「協働的な学び」を支えるファシリテーションはますます重要になると考えられます。

今回の講演会では、我が国においてコーチングの第一人者であり、従来のティーチングによる指導を見直し、ファシリテーションとコーチングによる指導を中核とした「学習学」への移行を提唱している本間正人氏を講師にお迎えします。自ら学ぶ意欲を高める為のコーチングとファシリテーションの考え方や方法について、アクティビティーや本学の村上忠幸教授との対談を交えてご講演いただきます。

今回は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からオンライン開催となりますが、皆様の多数のご参加をお待ちしております。なお、参加申し込み詳細については、本学ホームページやチラシにてお知らせしております。

日　時：２０２２年２月１９日（土）　１４：００～１６：３０
Zoom配信にて実施（参加無料）

テーマ：これからの教育（令和の日本型学校教育）と
教師に求められる資質・能力
学びを楽しめる教師であるために
～これからの教師に求められる
省察・コーチング・ファシリテーション～

申し込みは右の二次元バーコードまたは下記URLからどうぞ
https://forms.gle/RNtE4ternxF1gnan9

詳細はセンターHPに掲載のチラシにてご確認ください

＜講師の本間正人氏プロフィール＞

「教育学」を超える「学習学」の提唱者であり、「楽しくて、即、役に立つ」参加型研修の講師としてアクティブ・ラーニングを25年以上実践し、「研修講師塾」「調和塾」を主宰。誰もが最新学習歴を更新し続ける「学習する地球社会（Learning Planet 2050）のビジョン」を創ることをライフワークとしている。

現在、京都芸術大学教授、社会情報大学院大学客員教授、松下政経塾主幹、NPO学習学協会代表理事、一般社団法人大学イノベーション研究所代表理事、一般社団法人クロスオーバーキャリア代表理事、一般社団法人キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会理事、NPOハロードリーム実行委員会理事などをつとめる。コーチングやポジティブ組織開発、ほめ言葉、英語学習法、などの著書79冊。

各事業の報告

「学び続ける教員へのメッセージ」シンポジウム

「学び続ける教員へのメッセージ」シンポジウムを２０２１年１１月２０日（土）にオンラインライブ配信にて開催しました。「学び続ける教員へのメッセージ」では、今後数回は中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の中から話題を取り出しテーマとすることとし、そのキックオフとなる今回のシンポジウムでは小学校高学年における「教科担任制」を取り上げました。テーマを「これからの教育（令和の日本型学校教育）と教師に求められる資質・能力　みらいの義務教育と子どもたちの学び～教科担任制から考える「授業づくり・学級づくり」～」として、初田幸隆氏（京都市教育委員会）、榊原禎宏氏（京都教育大学）、赤松大輔氏（京都教育大学）をシンポジストとし、心理学や海外の事例、教科担任制導入に関する学校の現状と課題といった観点から話題提供・意見交流を行いました。

９４名からの申し込みがあり、配信後のアンケートでは視聴者から「専門的で経験豊かなパネリストの最新情報が現場感覚に合っていた」等の声をいただき、大変好評でした。

シンポジウムの様子→
左から司会の冨永吉喜氏、榊原禎宏氏、初田幸隆氏、赤松大輔氏

Web動画を活用した小・中学校理科教員対象の反転型研修

２０２１年１１月２日（火）、谷口和成教授を講師として、「見方・考え方」に着目した小・中学校教員の理科指導力向上のための研修を京都府教育委員会と協働して実施しました。本研修は、受講者が講義動画を事前に視聴し、研修当日はそれに基づく授業づくりを経験した後に受講者同士で振り返るといった反転型の形式で行われました。

事前学習では、はじめに「科学的思考力をはぐくむ理科授業の在り方」講義動画（約７０分）を視聴し、深い学びの鍵となる理科の「見方・考え方」と心理学者ピアジェの提唱する「変数制御」などの形式的操作のいくつかの推論パターン（シェマ）との類似性と認知発達との関係性について学び、続いてヴィゴツキーの理論に基づく介入により、その操作能力を育む授業展開の基礎の理解を目指す内容となっています。また、この介入による児童生徒の学習に対する動機づけへの影響とその支援の重要性についても紹介されています。

当日の研修では、はじめに、上記の介入の具体的展開例として、パイプを叩いたときに出る音の高さとパイプの材質、長さ、太さなどの変数との関係性を調べる活動を通して、理科の考え方のひとつ「条件（変数）制御」を働かせることに主眼をおいた模擬授業を体験し、通常の理科授業の展開と異なる点について、受講者間の討論を通して顕在化することで、この介入を行う意義と理解を深めました。

その後、この展開を実際の理科授業に応用するため、受講者が持参した教科書から理科の「見方・考え方」を育みたい単元をグループ毎に選択し、それを実現する授業を立案しました。その後、立案した授業のポイントをグループ毎にタブレットに記入し、授業支援クラウドを活用した発表、議論を行い、「見方・考え方」を働かせる多様な方法を共有しました。

受講者へのアンケート結果では「実験の組み立て方を変えていこうと感じました。結果に誘導する実験ではなく、問題解決能力を身につけさせる問題（授業）にしていきたい。」「今日の内容は、他教科の授業づくりにも活かしていける。」などの感想がみられ、好評を博しました。

今後もセンターでは教員養成・研修の支援を行っていきます

「使ってみよう　ICT！」講習会

↑講習会の様子

本格的導入が検討されているデジタル教科書や、京都市立学校等で利活用されている学習支援ソフト「ロイロノート・スクール」に関する学生向けの講習会を開催し、１０月から１１月にかけて計４回で延べ８１名が参加しました。教職キャリア高度化センター教員の学内プロジェクトとして実施したものです。

前半の２回はデジタル教科書の出版社から講師を招き、機能や特徴、実践事例などの講義の後、一人一台のタブレットを用いて、操作を実体験しました。後半の２回は、学習支援ソフト「ロイロノート・スクール」の利活用について、児童生徒側の機能、教師側の機能を中心に、この操作や実践に長けた本学学生の協力を得て学びました。データの送受信の方法等を確認後、教材の配付機能、質問への回答機能、共有機能などを使って、学習場面を想定したグループ学習を行いました。

受講者のアンケートには「実際に体験できてたいへん良かった」「デジタル教材の使い方について理解が深まった」などの声が寄せられ好評でした。

メンターシップ育成講座

昨年度はコロナ禍のなかオンライン開催で後期のみの実施でしたが、今年度はオンライン開催で前後期各３回（各回３０名を定員として募集）実施が実現しました。参加者は、前期：コーチング力３４名、省察力２７名、ファシリテーション力２２名、後期：コーチング力２３名、省察力２７名、ファシリテーション力２９名でした。参加者は日本全国（前期にはカナダからも）に渡り、メンターシップへの関心の高さがうかがえます。本講座は２０１８年から現在の形で実施していますが、回を追うごとに参加者の顔ぶれも増え、学校でメンターシップを活かしている方、これから取り組もうとしている方など様々に広がりを見せています。これからもメンターシップの育成に向けて内容の充実を図りたいと考えています。

スポーツ指導者養成事業

↑学生が小学生に指導を行う様子

今年度は、子どもへの運動指導の学び場であるKYO2クラブが新型コロナによる活動休止のため、授業科目「スポーツクラブ指導入門」では学生同士での学びを中心とした指導実習を行いました。一方で、授業履修後のインターンシップでは、京都市立藤ノ森小学校の協力により、前期にバスケットボール＆体操（全８回）、後期に陸上＆サッカー（全９回）の運動教室を実施し、子どもへの運動指導を学びました。インターンシップは１年ぶりの活動となり、２４名と多くの学生が参加しました。

令和４年度のスポーツクラブ指導入門では、コロナ禍で実施した授業形態を発展させ、コロナ前の指導実習スタイルとミックスした新たな形での授業を行う予定です。

センター教員だより

本コーナーでは、教職キャリア高度化センター所属の教職員からのコラムを掲載します。今回の投稿者は研究協力・附属学校支援課でセンター関係の事務を担当している河嶋宣治主査です。

福は内

研究協力・附属学校支援課
河嶋　宣治

かつて私は鬼だった。友人から時給がいいと誘われ、飛びついたアルバイトだ。あれは１９９５年２月だったか、晴れて寒い夜、とある神社の節分祭の話をしたい。段取りはこうだ。友人は赤鬼、私は青鬼の着ぐるみに金棒で２人は登場し、参拝客を脅しつつ、拝殿で暴れる。次に巫女さんが弓矢で撃つので、鬼は退散する。最後に、巫女さんから参拝客に豆まきをする。神社の方からそんな説明だった。やがて、近所の子供連れを中心にパラパラと人が集まってきた。ぶっつけ本番、社務所から拝殿に向かう仮設通路から鬼の登場だ。

ところでみなさんは、鬼がどう喋り、吠え、動くのか、知っているだろうか。ガオーか？イヤーか？そもそも喋るのか。私はもちろん知らないため、鬼になりきれず登場一歩目から苦しむことになった。また、着ぐるみは可動域が狭く、動きはぎこちない。観客の安全のため、せっかくの金棒もフェイントだけで、子供から「こわないわ」とナメられる始末。そして己を呪った。怖がらす驚かすの経験のほとんどない私が、同級生の悪そうな奴から大体逃げてた私が、そもそもコワいコワい鬼役なんて無謀すぎたのだ。そんなことすらわからず、なぜ引き受けたのかと。神社も神社だ。どうして弱そうでヒョロくて不器用そうな私に鬼役を託したのかと。もはや手遅れだ。拝殿に上がり、悔しまぎれに金棒を振り回し時間を稼ぐ。着ぐるみで視界が悪く、焦りもあって、まわりの様子が見えない。赤鬼の様子がおかしいので、ようやく巫女さんが弓矢を射掛けていることを知る。私は慌てて突如不自然に倒れ、せっせと痛がるフリをする。さっきまで平然と弓矢を受けていたのに、ひどい大根役者だ。そして社務所まで退散して出番は終了した。疫病退散を願う大切な神事が、こんなのでよかったのだろうか。せっかくお越しの方や神社の方に申し訳ない想いと、情けなさでいっぱいであった。これが鬼を演じた私の、いろいろ寒々しく消し去りたい記憶の一つである。

さて、いま私達を疫病から守っているマスクだが、日本では江戸時代に石見銀山で粉じん対策として発明されたものがご先祖で、覆面を好字にして福面としたという。もう鬼の面をかぶるのもコリゴリだ。今年の節分は、福面をして「福は内、疫病退散」と祈願してみることにしよう。

所属教員

センター長	髙柳　眞人
センター次長	市田　克利
	樋口　とみ子
専任教員	冨永　吉喜
	中垣　ますみ
	村岡　徹
	椙山　直美
	福間　拓
兼任教員	榊原　禎宏
	植山　俊宏
	村上　忠幸
	小山　宏之
	相澤　雅文

連絡先

ボランティアオフィス
（月～水・金　10:30～13:30、木　10:30～14:30）
スポーツ指導者養成オフィス
（月～金　10:00～13:00、14:00～15:00）
事務担当
（研究協力・附属学校支援課
研究協力・センター機構支援グループ）